

佐藤雅彰先生（学びの共同体 SV） 招聘校内授業研究会

校内研修テーマ：共に学び合い確かな学力を身につけていく児童の育成

～ 各教科の言語活動の充実を通して ～

授業者個人研究テーマ	きき合う関係をつくるための、ペア学習やグループ学習を取り入れた授業づくり。
------------	---------------------------------------

(1) 単元名：面積

(2) 本時の目標： これまでに学習してきた公式や面積の求め方の考え方を使って、直線図形の面積を求めることができる。

今年度、奥間小学校は校長先生が替わり、新たな学校改革の船出である。どんな学校にしたいか、どんな授業にしたいか、どんな子どもに育てたいか（佐藤雅彰）。新たなメンバーでの航海で、今一度みんなで学びの編み直しである。

本日は学びの共同体 SV の佐藤雅彰先生を招聘し、午前中に全学年の授業公開と5校時に5年生算数の焦点授業が提案された。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

[既習学習の確認]

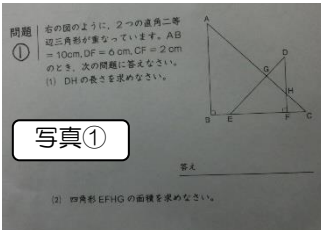
授業者は、可視化（折り紙）できる資料やこれまで授業で扱ってきた資料を提示し、公式や変形図形の面積の求め方を確認した。授業者は今年度赴任してきた、子ども達との関係もこれからである。4月当初から「私と子ども」「子どもと子ども」の関係づくりのため、日常からあらゆる活動にペア学習やグループ



活動を意図的に仕組んで協同や支え合うことの大切さや、みんなでやりとげることの喜びを感じさせたいと授業に臨んでいるという。授業者にとって、

所が変わり、相手が変わった、この子達との関係づくりに試行錯誤が続く。…前年度はどうであったろう？同僚や周りからの情報がカギになる。「①分からないとき訊き合っているのか？」「②中間の困り感を支えてあげられているのか？」「③競争ではなく協同に向かっているのか？」今一度全職員で確認し、①～③の間に正直に素直に向かい合って各教室を見直していくことが大切である。そしてこの学校とこの子達の未来を見据えた授業経営、学校経営の理念や哲学の編み直しを素直に受け入れることである。

[共有課題] 普通は、教科書レベルの問題を足場づくりの問題として扱い、授業後半に教科書のレベルを超えたジャンプ課題への挑戦へとするが、本日授業者は写真①の問題を共有課題と設定し、もう1問別のジャンプ課題を準備していた。本日の共有課題も教室



写真①

によっては、かなりハイレベルの設定となるが、授業者はこれまでの積み重ねと、この子達へ期待を込めての挑戦である。共有課題やジャンプ課題のレベルの設定は、やはり担当がしか決められない。この子達の質やレベルを一番知っているのは担任だからである。

写真②、解決への足場を確認する。



[考える] 各々がワークシートに向かい、まずは自分でやってみる。

簡単ではない、「訊き合う必然」が授業者によって仕込まれている。しかし、気にはかけているがなかなか子ども同士が「つながらない」…難しい！しばらくの間授業者も辛抱である。「分からなければ訊いてごらん」授業者は、何度か声をかけケアにあたる。



[関係を探る] 学び合う授業は互いに支え合う「関係づくり」である(佐藤学)

つながりそうでつながらない⇒つながらないから、深まらない・広がらない⇒個の学びが成立しない！
写真①、左奥のA君は、しきりに正面のB君の様子をうかがっている。しかしA君から「依存」の言葉が出てこない。写真②、気づいたB君が説明に入るが、自分分からないことがうまく説明できないA君である。さらに致命的なのは、困ったときに素直に友達に訊く「教えて?」「助けて」が言えないでいる。

学びの共同体の授業づくりは、「きき合う関係」づくりである。1学期から授業者が奮闘するがなかなか素直につながらない子ども達。頑固に自分の弱みを隠したがる。…なぜ?



この子達の経験の中に素直になれず、頑固に通さなければならない状況が過去にあったのだろうか、前年度からの同僚の情報が大切になってくる。このギクシャクした教室の空気をどうにか変えていきたい授業者根気とエネルギーを要することが想像できる。せめてもの救いなのは、1学期よりは…、2学期当初に比べたら…など、小さな変化が起きていることだけは確かである。様々な個性が共存する教室である、さまざまな教室の環境がつくられる。100回言ってダメなら101回言うてみる。1000回言ってダメなら1001回言うてみる(佐藤雅彰)。誰とでも、何事においても、根気強く子ども達と接して「この子達のために」…

教師の使命感とエネルギーでしか空気は変えられないのである。大切なことは「決してあきらめない」ことである。教師も同僚に依存しながらすべての教師がこの教室の事実に向かい合うことである。

[共有する] 問題①の共有



たどたどしい言葉で説明する。「まず」「つぎに」「だから」が素直に出てこない、焦らないで子どもの言葉を受け入れていくしかない。発言は授業者に向けられているが、授業者も淡々と聴いてあげている。ここから始めていくしかない。授業者も割り切りが必要である。



右の写真、私が光を感じた瞬間です。仲間の発表を見つめる仲間の視線です。「僕だって分かりたい。」「取り残されたくない」そんな視線です。

[つながる] ⇒ もうひと押し。言葉を持たせる。「分からない」ことは恥ずかしいことではない、分からないことを訊けないことが自分を困らせていることに気づかせたい。「おしえて〜」、「なんで?」。写真④、分からないことを素直に訊ける子は救われる。二人のグループ員から手厚いケアをいただく。写真⑤⑥、授業前半より仲間との距離が縮まり、子ども達の表情がやわらかくなってきている。



[授業リフレクション研究協議会]

雅彰先生が撮影した授業ビデオで振りかえり。学びの視点で子どもの発言や、行為、授業者の発問、躓き等を省察する。

☆ 説明の3段階法「まず・つぎに・だから」

☆ 学び合えない子どもは教師が徹底してあずかる。

▲ 厳しい子は、支える子どもが辛くなる。

☆ 補助線の使い方がカギとなる。「なぜここに?」、「何がわかるようになったの?」補助線の理由や意味を説いて共有すると新たなひらめきが生まれたのではないか?

☆ スキャホルディング ⇒ ジャンプのための足場づくりについて。

☆ 相手のプリントの上で説明させる。黒板にこだわらない、机上でつなげてあげる。

☆ 子どもとのスキンシップは手のひらでやる⇒温かさ、柔らかさ。



『一人残らずすべての児童が「安心」して過ごせる学校』

《 教師達へ 》

国頭学びの会ゆい

学校の機能（システム）は、「子ども達のために」向けられて初めて学校の目的と役割を担うことができたこととなる。多様化する各家庭の中で、我慢や辛さを強いられてそれを乗り越えて学校に「安心」と「私の居場所」を求めて学校に登校してくる子もいる。普通という言葉は基準として設定されるが、その「普通」の基準レベルも家庭において様々である。さらにその普通を超えた特別な例外も存在することを受け入れる必要があり、その事実を受け入れる教師の器が要求される。

学校は「人格の形成、平和（安心）で民主的（平等）な国家（学校）の形成者の育成」を目指して子ども達が健やかで豊かに育つ場所であることが大前提である。しかし学校や教室がその目的や理念からゆがめられ、「教師にとって都合のいい経営」に向けられたとき、その学校と教室は困難を抱えることになる。（教師のアポリア、教室のジレンマ）

単純に賞罰で子ども達を動かしたり、教師の威圧や、集団行動を名目にした統制型の指導は、指導した教師の目の前でしか通用しない。翌年に子ども達を任せられた教師には苦労だけが引き継がれることになる。中学校に行ったとき「威圧」や「怖さ」による統制はかえって生徒の反発を招き、生徒の心を真逆に刺激してしまう（中学校の教師達の嘆きとなる。）

学校に通うすべての子ども達が安心してその苦難や嘆きを語り（心を開き）、教師や保護者、地域の人がいっしょにその困難の解決に向かい、互いが成長し合えるそんな「安心」できる学校創りに正面から向き合うことを教師の使命の一つと考えたい。

そのために以下



- ☆ 子どもの「家庭」の愚痴をこぼさない。
子どもの現実を受け入れる。
- ☆ 家庭でできないから学校がある。
家庭の困難を学校で乗り越える。
- ☆ 弱い子どもの背景には、さらに弱い親がいる。
親の弱さから子どもを引き受ける。
- ☆ すべての子どもを受け入れる。
すべての職員が受け入れる。
- ☆ 学校のおかげで育つ子を見とどける。
成長を語れる教師になる。
- ☆ 「注意！」よりも「声かけ」を心がけましょう。